

フランスにおける社会運動の変容とポピュリズム — ピエール・ビルンボームの集合行動論をめぐって —

大阪市立大学 稲永祐介

1. 目的

ピエール・ビルンボームの研究は、わが国の政治学ではフランスの共和的国家論と行政エリート論として著名であり、歴史学ではフランスのユダヤ人論として知られる。しかし、本報告が取り上げる彼の集合行動論は、わが国においてこれまで体系的に論じられることがなかった。本報告の目的は、彼の集合行動論が、フランスの現在の社会運動を分析するにあたって、どのように理論的に有用であるのかを検討し、その学問的利点をわが国の社会理論に導入することにある。

2. 方法

まず、ビルンボームが論じる 1980 年代からのフランスにおける労働運動の衰退と集団的な権利要求の台頭を検討することで、社会運動がいかなる敵手を標的とし、どのように人びとを動員するのかを明らかにする。次に、2013 年にフランスで法制化された「万人のための結婚」（いわゆる同性婚）への反対運動に焦点を当て、彼がこの運動を分析するときに用いる理論枠組みを再検討する。

3. 結果

ビルンボームによれば、社会運動の性格は国家類型に応じて異なる。フランスのように、公共空間が革命以来の普遍主義的な理想にしたがって国家化され、諸条件の平等が目指される社会では、権利要求の矛先は、中央集権的な国家に向けられる。だからフランスの労働運動は、「強い国家」に対抗するために、組合が主導するストライキを組織した。しかし、その動員形態は、高度経済成長の展開と共に、私的生活の充実を求める交渉へと変容し、社会運動の傾向もこれまでの階級闘争からそれぞれの争点に応じた市民運動となる。けれども、個々人が個別的な集団利益のために動員される時、その標的となる敵手は、中央集権的な国家であることに変わりがない。彼の社会理論が「同性婚」反対運動に応用される時、フランスにおける国家と社会運動の関係構造がはっきりする。すなわち、領土を横断して人民を動員するスローガン、「フランスをフランス人のもとへ！」というポピュリストの運動が共和的国家に対して歴史的に繰り返し現れることが明らかとなる。

4. 結論

フランスのように国家エリートが制御する社会では、社会運動の敵手は、イギリスやアメリカと違って資本家などの特定の社会・文化的アクターではなく、政治機構としての国家である。この知見がビルンボームの集合行動論の独創性である。彼によれば、右派であれ、左派であれ、ポピュリストの運動は、日常生活の困難や社会不満を抱える個々人を、それぞれの異質な属性にもかかわらず、ひとつのフランス人民という名において画一的に結集させ、国家に対抗させようとする。この理論枠組みには、「フランスらしさ」に介入する国家行政への嫌悪や制御不能な集合的暴力に特徴づけられる、ナショナリズムへの歴史社会的な分析の視座がある。我われは、国家類型に応じて社会運動のイデオロギー・フレームを比較する彼の方法に、理論的な意義を見いだすことができる。

参考文献

- Birbaum, P. 1988. *States and collective action : the European experience*, Cambridge, Cambridge University Presse, 232 p.
-----, 1991 (1986), « Action individuelle, action collective et stratégie des ouvriers », in P. Birbaum et J. Leca (sous la dir. de), *Sur l'individualisme*, Paris, FNNSP, p. 269-298.
-----, 1992. « Conflits », in R. Boudon (sous la dir. de), *Traité de sociologie*, Paris, PUF, p. 227-261.
-----, 1993. « Mouvements sociaux et type d'États : vers une approche comparative », in F. Chazel (sous la dir. de), *Action collective et mouvements sociaux*, Paris, PUF, 267 p.
-----, 2010 (1979). *Genèse du populisme. Le peuple et les gros*, Paris, Fayard, « Pluriel », 280 p.
-----, 2015. *Sur un nouveau moment antisémite « Jour de colère »*, Paris, Fayard, 157 p.